

いの流水俳壇

松尾 満津於 選

兼題「行く秋」「当季雑詠」

吉良 芙美

烏瓜女の意地をとおしけり

(評) 烏瓜は秋の山麓等で、よく見受けられる鶏卵より稍小さい赤い実である。枯れ細った蔓にぶら下がり、落ちそうでなかなか落ちない。その種子を「たまずさ」というところから、文、手紙、恋文にたとえられるが、「女の意地」とは何なのか、推量の域を出ないが、決して投遣な気持ちから生まれた作品ではないことは確かな句であるように思う。

柳原 喜美子

四畳半真赤なカンナ活けて一人

(評) 四畳半といえは一瞬間な思いが脳裡をよぎるが所詮は淋しい一人なのである。精神的な満足を吐露するのなら、敢えて真赤なカンナでなくともいいような気がする。結語に一人を据えた作者の心情には、信頼できる誰かの観賞の一言が欲しかったのではあるまいか。

いと静か京の旅籠のちちろ虫
森元 二美子

(評) ちちろ虫は蟋蟀のこと、鳴き方によってそれぞれ分類があり、「えんま、つづれさせ、みつかど、おかめ」などがそれぞれである。部屋の隅や縁側などで鳴く「いと静か」は、静かなことを強調した言葉で、如何にも京都の旅籠らしい夜の様子がそのまま写生されている。

小島 良

行く秋や水揚げの魚跳ねてをり

(評) 秋刀魚漁であろうか。庶民の味覚として親しまれているこの魚の産卵は、千島列島附近から南下して、伊豆諸島の過程の中に網を入れ捕獲する。漁獲の良否に一喜一憂する海の漁師の心の弾みが見える句である。

津田 久美

みどり児の指吸う構え秋灯下

(評) 指を吸う行為は母親の乳を恋う仕草。乳を吸うことは母と児の最初のコミュニケーションである。そのバランスがくずれたとき児は指を吸うことを知る。それを最初に覚るのも母親、秋の夜長に抱いたみどり児に、ややおそくなつた授乳の刻を態度で詫びている姿を垣間見る思いがする。

岡本 とも子
糸瓜忌や俳誌整頓して終る

川上 こよね
大寺の間合を渡る萩の風

中野 好子
秋風や差す手引く手の駒の音

中屋 桜子
秋霧や独り籠いて母の忌を

弘瀬 うき子
敬老日サンバ手拍子華やげり

片岡 包女
太縄で縛り上げたる秋桜

間 浩太
鏡拭く鏡の奥に秋深む

友草 水月
母の背のますます丸し秋の行く

竹崎 光子
行く秋や素顔となりし千枚田

川村 博子
運動会探す決めての赤い靴

渡辺 万利子
行く秋や虫の合唱消え去りて

川村 愛
木犀の香りほのかに厨窓

松岡 きよ子
竜神の住むてふ淵の彼岸花

大川 節弥
草に鳴く虫の音夜を深くして

川村 千図子
曼珠沙華燃え尽き里の力抜け

楠目 哲郎
コスモスの花咲いて試歩の道

筒井 眉躬
行く秋や皺少し増え肩すぼめ

伊藤 たみ
菊活けて物足りなさを考える

藤田 里野
豊作や猪の囲いも張りしまま

筒井 文
虫の音と笈の水のリズムかな

隅田 芳恵
宵闇の自転車の音塾帰り

松尾 満津於
ふり向けばそこに妻いる秋日和

次題 「当季雑詠」 五句
締切 毎月十五日

投句先

吾北教育事務所
上八川甲2010

☎ 86712133

今月のこども川柳

うさぎさん とんでばかりで たのしそう

神谷小 2年 鎌倉 文哉

夏の川 およいだ帰り あぶたかる

下八川小 3年 田中 三稀

新聞紙 いろんなものに リサイクル

伊野小 4年 野村 実穂

休みの日 みんなの笑顔 思い出す

神谷小 4年 細木 直輝

秋の色 もみじに夕日 まっかだな

伊野小 5年 塩田 泰志

庭にまで サンマのにおい よだれ出る

清水第一小 6年 川村 知也

コスモスが やさしくゆれる 風の中

清水第一小 6年 山中 美佳

秋になり 夜空を見ると オリオン座

清水第一小 6年 西内 翔

